

クラス外の人たちとつながることを目指した実践報告

小原美果¹, 大野渚美子², 牧野圭二郎³

¹三和学院／ブラジル
g0832449@gmail.com

²ラーモス日本語学校／ブラジル
namiko_1808@yahoo.co.jp

³早稲田大学大学院生
languejaponaise2015@gmail.com

キーワード - 日系社会, 日本語学校, 子どもの教育, つながり, JICA ボランティア.

論文要旨

本稿では、筆者が JICA ボランティアとしてブラジルに派遣されていた時に日系団体運営の日本語学校（以下、日本語学校）で行った活動を報告する。中島（2015）は「異国の地で世代を超えて言語を継承するというのは非常に難しい」と述べており、ブラジルの日系社会においても日本語の保持が難しくなっている。そのような中で、現地語が生活言語である子どもたちに対して、「日本語を使う場」をどのように作るか。3名の筆者（元 JICA ボランティア）は、クラス外の人たち、地域の人たち、同じ境遇を持つ他国の人たちとの「つながり」を意識した活動を行い、その結果「日本語を使う場」を作ることができた。

1 実践の目的

目的は「つながり」と「交流」（渡辺他 2019）である。渡辺他（2019）は「他校の生徒と交流することにより新しい友達が増え、周りの世界が広がり、新しい世界を知り、新しい考え・価値観が得られ、新しい可能性を生み出します」と述べている。この考えは、日本語学校、日系社会の中で生きている子どもたちの成長を考えていく上で重要である。なぜなら、子どもの成長には、言語教育だけでなく、将来、ブラジル社会や日本社会に豊かな貢献ができるように、人間教育も必要だからである。人間教育の一環で、3名の筆者は、クラスの中だけの「つながり」ではなく、クラスを越えた「つながり」を築くための活動を行い、学校全体、コミュニティ、他国の仲間との「交流」を図った。

2 実践の内容

2.1 生徒交流会 にほんごデー（サンパウロ州 A 日本語学校）

対象者 9歳～40代 日系非日系の学習者約20名
日本語レベル ひらがなのみ既習～N5

内容は、午前中にアイスブレイク、昼食は調理実習、午後は日本語ゲーム大会というものである。アイスブレイクでは、聞き取った単語の文字数と同じ人数のグループをつくり、そのグループ内で自己紹介をするという活動をした。調理実習では、年少者はおにぎり、青年・大人はお好み焼きを、参加者が協力し合い作った。日本語ゲーム大会では、異なるクラスとレベルで構成されたチームに分かれて、お箸リレーや伝言ゲームなどを実施し、得点を競った。最後はチームごとに折り紙を折り、寄せ書きとしてポスターを作った。

2.2 キャンプ（サンタカタリーナ州 R日本語学校）

対象者 7歳～20代 日系非日系学習者約20名
日本語レベル 初級～初中級

内容は調理実習、レクリエーション、文化体験のワークショップ含むプログラムを保護者とともに1泊2日のキャンプとして行った。年齢、日本語レベル、クラスが混ざるようにグループ分けして協働活動を促した。

2.3 文通（サンパウロ州 I日本語学校）

対象者 12歳～13歳 日系4名
日本語レベル N4レベル 授業回数 5回（90分/回）

内容は、ボリビアの日本語学校に通う同年代の生徒と日本語で文通するというものである。まずは1回目の授業でこの文通の趣旨を説明し、手紙を書くことに慣れていないため、手紙にどんなことを書きたいか話し合った。2・3回目の授業で、初回に話し合った内容をもとに、箇条書きで名前、街の紹介、趣味などを書いた。4回目の授業で、手紙文にするために、箇条書きで書いたものをまとめた。郵送で送り、後日、ボリビアの日系の子どもたちから返事が来て、また手紙を書くというやりとりを2回行った。

3 実践の結果

3.1 生徒交流会 にほんごデー（サンパウロ州 A日本語学校）

活動の結果、これまで学習してきた日本語の知識をゲームを通して共有する中で、今まであまり接することのなかった生徒同士が打ち解けることができた。実施後のアンケートでは、全ての参加者が「他のクラスの人と話すことができた」と回答。「とても楽しかった」「このようなイベントをずっとやりたいと思っていた」というコメントもあった。また、後日お好み焼きを自宅でも作るなど、このイベントで学んだことが生活の中でも実践された。

3.2 キャンプ（サンタカタリーナ州 R日本語学校）

活動の結果、教師以外の人に日本語で何かを伝えるというこれまでになかった場面ができた。年長の生徒が年少者に教える場面も見られ、教室学習ではできない縦の協力関係

も見られた。年長者にとって知っていることを教えることは自信につながるし、年少者にとっては今後の学習の目標になる。

3.3 文通（サンパウロ州 I 日本語学校）

活動の結果、ボリビアの日本語学校の生徒9名との文通がきっかけで、連絡先を交換し、お互い連絡を取り合うようになった。子どもたちに話を聞いたら、「ボリビアの子たちのほうが日本語が上手」や「今度、ふれあいセミナーで会う約束をした」などの楽しい話を聞くことができた。

4 まとめ

今回の活動は現地の教師と JICA ボランティアの協働によってできた。クラスや学校の枠を超えた「つながり」を目的とした活動が、結果として、日本語を使う場ができただけでなく、学校やコミュニティの縦のつながりをより強固なものにすることができたと思われる。また、現地の教師と協働で行ったことにより、教師同士のつながりも強くなったと思われる。

参考文献

- [1] 中島和子（2015）『増補版バイリンガル教育の方法 12歳までに親と教師ができること』アルク
- [2] 渡辺久洋・松田真希子（2019）「人間教育としての日本語教育—ピラール・ド・スール日本語学校の実践—」『早稲田日本語教育学』第26号 pp27-42